

報告

沖縄県立看護大学新入生の英語に対する意識について

與那嶺 敦¹⁾ D. Craig WILLCOX¹⁾

本研究の目的は、本学の学生が英語に対してどのような意識をもっているか等を調査することにより、より効果的な「動機付け」への手がかりとし、今後の本学における英語教育を改善していくための基礎的資料とすることであった。

平成16年度の看護学部看護学科1年次入学生80名を対象に、1年前期「英会話I」の第1回講義時間を利用して28項目からなるアンケート調査への記入を依頼した。本調査から、平成16年度の本学の新生には全体として次のような特徴がみられる。

英語自体については、「好きで興味はあるものの苦手意識をもっている」「受容的側面(Reading, Listening)に比べて行動的側面(Writing, Speaking)に苦手意識がある」「入学時点の英語力は、センター試験を受験した全国の大学新入生の平均レベルに達している」などである。

英語の講義については、「学習意欲を十分もっており講義を楽しみにしている」「大部分の学生が英語の運用能力、特に会話力を伸ばすことを重視している」「楽に単位をとりたがっている」「講義時間の中では映画や音楽などを利用したエンターテインメント性が期待されている」などである。

これらの結果から、新入生が概して大学英語に取り組む意欲や能力を備えていることをふまえ、今後は講義の中で行動的側面をより丁寧に指導して自信をつけさせるとともに、視聴覚教材を効果的に利用しながら講義をより活性化していきたい。

キーワード：英語に対する意識 看護大学 英語教育

I. 緒言

英語は世界51カ国で5億8千万人の人々に第1もしくは第2言語として使用されている¹⁾。グローバル化の流れの中で、インターネットや研究論文においても英語が共通のコミュニケーション手段として選ばれることが多い。その一方で、中学・高校で6年間英語を学んできたにもかかわらず英語を使えない日本人が多いことやそれに基づいた英語教育に対する批判は、久しく一般に浸透している感がある。いわゆる「文法偏重」により英語嫌いを生み出していることも容易に予想される。そのような状況を受け、大学の英語教育においても実践志向への模索が続いている。

沖縄県立看護大学(以下「本学」)においても、他の多くの大学と同様、教養課程の科目として英語が必修となっている。「英会話I・II」、「英語講読I・II」、「英作文I・II」の6科目、各2単位が開講されており、それぞれにおいてIが必修、IIが選択である。英語専攻ではない看護学生にとって興味のもてる内容になるよう、開学以来、昨年度までの5年間、例えば会話用テキストを看護場面が扱われているものにするなど、特に教材の選択において改善がなされてきた。今後は、限られた講義時間の中でどのように英語の実践能力を伸ばすことができるかが教員としての挑戦的課題となっている。語学学習においては特に「動機付け」が成果を左右する大きな要因と言われている²⁾。英語学習への意欲をどのように

引き出すかを検討するにあたり、学生の現状を把握する必要があるが、今回その初の試みとして学生の英語に対する意識を探ることにした。本研究の目的は、本学の学生が英語に対してどのような意識をもっているか等を調査することにより、より効果的な「動機付け」への手がかりとし、今後の本学における英語教育を改善していくための基礎的資料とすることであった。

II. 研究方法

まず、調査用紙の作成にあたっては、多面的な質問から妥当性のあるデータが得られるように様々な設問を用意した。設問の主な内容は、1) 英語自体に対する意識、2) 英語学習に対する意識、3) 資格、4) 課外の活動、5) 英語能力、6) 講義に対する自由意見であった。それらの質問を回答レベルに合わせて、5段階のリッカート尺度やはい・いいえ回答式質問などの閉鎖型質問を中心として整えた。設問28項目の順序についても、キャリアオーバー効果などのバイアスを避けるため、特に否定的内容の設問の直前に肯定的内容の設問で誘導することがないように配慮した。その後30代の社会人男性に事前テストをおこなったところ、通常のリッカート尺度で見られる「1=強く賛成」、「3=どちらでもない」、「5=強く反対」という回答選択肢がわかりにくいとこのことであったため、「5=はい」、「3=どちらでもない」、「1=いいえ」に改めた。

平成16年度の看護学部看護学科1年次入学生80名を対象に、1年前期「英会話I」の第1回講義時間を利用

1) 沖縄県立看護大学

與那嶺他：沖縄県立看護大学新入生の英語に対する意識について

してアンケート調査記入を依頼した。バイアスを最小限にとどめるため、最初の活動として教員の自己紹介よりも先におこなった。本音を反映しやすいよう無記名式とし、アンケート用紙の最初に、1. 成績とは無関係であること、2. 講義やそれに関する研究のためにのみ利用されること、3. 依頼者が記入者を特定することはないこと、4. 「望ましい答え」ではなく「正直な答え」を求めていること、を明記するとともに、これらの点を記入前に口頭でもアナウンスした。また記入中は、「望ましい答え」に対する無言のプレッシャーを与えないよう実施者は教室の外で待機した。データの集計・分析には表計算ソフトの Excel 97 および統計ソフトの SPSS 10.0 J を利用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 英語自体に対する意識

まず、「1. 英語が好きだ」については「はい（段階 4・5）」が全体の回答の70%を占めた。「3. 英語に興味がある」にいたっては93%である。ところが「2. 英語は苦手だ」についても「はい（段階 4・5）」が79%にのぼっている。ここで、「好き（段階 4・5）」群（ $n=56$ ）と「嫌い（段階 1-3）」群（ $n=24$ ）に分けて苦手意識の中央値の差を Mann-Whitney の U 検定で比較したところ、「嫌い」群は「好き」群に比べて有意に苦手意識が高いことがわかった（ $z=2.625$, $p=0.004$ ）。ところが、「好き」と回答した学生でも、そのうちの73%（ $n=41$ ）が「苦手（段階 4・5）」と意識している。また、興味についても、「嫌い」群は「好き」群に比べて有意に興味は低かった（ $z=2.819$, $p=0.002$ ）。それでも、「嫌い」と回答した学生のうちの79%（ $n=19$ ）が「興味がある（段階 4・5）」としている。これらのことから、「英語は好きで興味はあるものの苦手意識をもっている」という姿が浮かび上がってくる。苦手意識が強いことは、後述の「26. 英語能力の自己評価」の低さにも表れている。

2. 英語学習に対する意識

1) 講義

英語の講義に関しては、「4. 楽しみ」で「はい（段階 4・5）」が71%、「5. 一生懸命勉強したい（以下「意欲）」ではそれが91%を占めている。ここで、「楽しみ（段階 4・5）」群（ $n=57$ ）と「楽しみでない（段階 1-3）」群（ $n=23$ ）に分けて、意欲の中央値の差を Mann-Whitney の U 検定で比較したところ、「楽しみ」群は「楽しみでない」群に比べて有意に意欲が高いことがわかった（ $z=3.455$, $p=0.000$ ）。しかしながら、「楽しみにしていない」と回答した学生でも、そのうちの74%（ $n=17$ ）は「一生懸命勉強したい（段階 4・5）」としている。これらのことから、全体として「英語学習の意欲を十分もっており講義を楽しみにしている」といえる

だろう。意欲は予想外に高く、英語力を伸ばせる可能性を示唆している。このことは後述の「15. 学習目的が不明」に賛成する学生がほとんどみられなかった現象や、「24. 選択科目を取ろうと考えている」学生の多さとも一致するものである。

2) 志向

英語能力のどの面を伸ばしたいかをたずねた設問 6-9 については、Listening と Speaking において「はい」が段階 5 のみでそれぞれ 96%、99%を占めた。残る回答も段階 4 であり肯定的な回答であることから、「全員が会話志向である」といえる。このことは、後述の「24. 選択科目を取ろうと考えている」学生のほとんどが「英会話」の受講を考えていることとも一致する。Reading と Writing においても「はい」が段階 5 のみでそれぞれ 86%、76%を占める。読み書きの両面を肯定（段階 4・5）した者は、全体の94%にのぼる。ここで、会話と読み書きにおける回答に相違がみられるかについて Wilcoxon の符号付き順位検定で分析したところ、Listening、Speaking とそれぞれ Reading（ $z=-2.658$, $p=0.008$; $z=-2.877$, $p=0.004$ ）、Writing（ $z=-3.749$, $p=0.000$; $z=-3.999$, $p=0.000$ ）に比べて有意に志向されていた。「読み書きも伸ばしたいが会話優先」という様子がうかがえる。

3) 留学と就労

「10. 英語圏への留学希望」では「はい（段階 4・5）」が全体の51%を占めたものの、「11. 英語圏での就労希望」では「はい（段階 4・5）」、「どちらでもない（段階 3）」、「いいえ（段階 1・2）」がそれぞれ 32.5%、37.5%、30%に分かれた。ここで、「留学希望あり（段階 4・5）」群（ $n=41$ ）と「留学希望なし（段階 1-3）」群（ $n=39$ ）に分けて、英語圏で働く希望度の中央値の差を Mann-Whitney の U 検定で比較したところ、「留学希望あり」群は「留学希望なし」群に比べて英語圏での就労希望が有意に高いことがわかった（ $z=3.869$, $p=0.000$ ）。ところが、英語圏留学希望者であっても、そのうちの英語圏就労希望者（段階 4・5）の割合は51%（ $n=21$ ）にとどまった。このことから「全体の2人に1人は英語圏への留学を希望し、そのうちの2人に1人が英語圏で働く希望ももっている」と分析できる。一方で、英語圏への留学希望がなくとも英語圏で働きたいと考えている者が少なからず（ $n=5$ ）存在していることも興味深い。これは「勉強より実践を求めている」群といえるかもしれない。設問では就労形態については意図的に限定しなかったため、就労希望者の回答には、留学希望の有無にかかわらず、正式な就職や一時的な日本からの派遣、ボランティアなどさまざまな形態が想定された可能性に留意しておく必要がある。

3. 英語学習に対するネガティブな意識

設問 12、14、15 は、英語学習に対するネガティブな

意識を確認する項目であった。「12. 単位を楽にとりたい」では「はい」が段階5のみで54%にのぼった。「14. 宿題はないほうがいい」では意見が分かれ、完全に賛成する者(段階5のみ)は18%にとどまった。ここで、「宿題なし賛成(段階3-5)」群(n=60)と「宿題なし不賛成(段階1・2)」群(n=19)に分け、単位を楽にとりたい程度についての中央値をMann-WhitneyのU検定で比較したところ、「宿題なし賛成」群は「宿題なし不賛成」群に比べて有意に単位を楽にとりたがっていることがわかった($z=2.105$, $p=0.018$)。ただし、「宿題なし不賛成」であっても、そのうちの89%($n=17$)が単位を楽にとりたい(段階4・5)と回答していることから、全体として「楽に単位をとりたいがっている」とみえる。学生がそう考えるのはむしろ自然なことかもしれない。次に、「15. 学習目的が不明」においては、完全に反対する者(段階1のみ)が73%を占めた。ここでも、宿題なしに賛成か不賛成かによって目的意識に相違がみられるかについて同様の検定をおこなったが、「宿題なし賛成」群と「宿題なし不賛成」群との間に有意差はみられなかった($z=1.538$, $p=0.062$)。さらに、前述の「5. 一生懸命勉強したい」かに相違がみられるかについても同様の検定をおこなったところ、「宿題なし不賛成」群は「宿題なし賛成」群に比べて有意に意欲が高かった($z=2.363$, $p=0.009$)。しかし「宿題なし賛成」であっても、そのうちの89%($n=54$)が一生懸命勉強したい(段階4・5)と回答していることは注目に値する。これらの結果から、「3人に2人が宿題はないにこしたことはないと思うが、彼らも学習目的はわからないことはなく、学習意欲もあるほうである」と解釈できる。

4. 英語自体に対するネガティブな意識

設問13と16は、英語自体に対するネガティブな意識を確認する項目であった。「13. 自分の将来に必要でないと思う」に対しては、完全な反対意見(段階1のみ)が75%を占めた。「16. 講義以外で英語とかかわりたくないと思う」に対してもそれは60%を占めた。このことから「英語自体を毛嫌いな学生は少数派」とみえる。ここで、「16. 講義以外で英語とかかわりたくない」の回答を「回避希望(段階3-5)」群(n=19)と「回避希望なし(段階1・2)」群(n=61)に分け、「13. 自分の将来にとって不必要」な程度について中央値の差をMann-WhitneyのU検定で比較したところ、回避希望なし群は希望群に比べて英語が将来不必要と考える者の割合が有意に少なかった($z=2.623$, $p=0.004$)。ただし回避希望群であっても、そのうちの68%($n=13$)は決して不必要とは考えていない(段階1・2)。これらのことから「自分の将来に英語は不必要と考える者は少ないほうで、その傾向は特に、講義以外で英語にかかわることに抵抗の少ない学生に顕著である」といえる。

5. 講義の成果に対する期待

設問17と18では、講義の成果としての2つの方向性についてたずねた。「17. 英語運用能力」については85%が完全に肯定(段階5のみ)し、「18. 看護知識」についても45%が完全に肯定(段階5のみ)している。運用能力を完全肯定する85%のうち、50%($n=34$)が看護知識についても完全肯定していることから、「大部分の学生が英語の運用能力を伸ばすことを重視しており、そのうち2人に1人は看護について学びながらという点も同等に重視している」といえる。現在、「英会話」では看護場面を扱ったテキスト、「英語講読」では健康問題を扱ったテキストを使用するとともに、「英作文II」では看護・健康関連のエッセイを書かせるようにするなど、英語学習を学生の専攻学科である看護と関連付けることにより、英語への興味を維持するだけでなく看護知識の向上の助けにもなるように配慮している。運用能力の向上については、必修科目に限って言えば1.5時間×15週×3期=67.5講義時間しか確保できない現実があり、実質的な向上に対する過大な期待はできないかもしれない。それでも運用能力向上に結びつくような効率的な教授法の検討・実践や、生涯学習として英語に取り組ませる動機付けをする努力は求められよう。

6. 資格

設問19、22、23は、英語の資格試験に関する項目であった。「19. 資格に興味がある」学生は50%(段階4・5)、実際に「22. 受験経験がある」のは83%、「23. 資格をもっている」のは74%にのぼった。受験経験、有資格とも英検が大部分を占めておりそれぞれ83%、70%であった。英検の合格級では3級が全体の26%($n=21$)、準2級が33%($n=26$)を占めた。これは、英検受験が盛んといわれる沖縄の中学・高校の英語教育界を反映した結果であろう。3級は「基本的な英語を理解し、特に口頭で表現できる」程度、準2級は「日常生活に必要な平易な英語を理解し、特に口頭で表現できる」程度³⁾とされており、本学の学生は概して基礎英語力を備えていると考えられる。このことは、後述の「27. 大学入試センター試験(以下「センター試験」)の得点」の高さにも表れている。現在の資格の興味対象は、英検(14名)の他にもTOEIC^a(9名)やTOEFL^b(8名)に広がっている。これらの受験経験者は少ないものの、英語によるコミュニケーション能力を知りたいと考えたり、留学を視野に入れたりしている学生が少なからず存在することは喜ばしい。資格受験に関する助言・指導についても現在、団体受験制度を利用してTOEICを本学で実施したり、「英作文II」においてジャーナル(日記)のトピックと

^a Test of English for International Communicationの略。英語によるコミュニケーション能力を測る指標の1つとして企業・団体・学校で国際的に採用されている。

^b Test of English as a Foreign Languageの略。北米の大学で入学時、留学生に一定の得点が求められることが多い。

與那嶺他：沖縄県立看護大学新入生の英語に対する意識について

して TOEFL の Writing 問題を活用したりしているところである。資格試験については、英語力を客観的に示すツールとして就職や留学の機会を拡大することに直接役立つものであるため、今後も講義に取り入れていくことを積極的に検討していきたい。

7. 課外の活動

設問20、21は、課外の活動を「学校外で英語運用能力向上やその動機づけに貢献することが考えられる因子」と定義したずねた項目である。一般の英会話スクールに通うなどして「20. 学校外で英会話を勉強してきた」学生は11%、短期間の旅行も含めて「21. 外国に滞在したことがある」学生は20%であった。全体に占める割合としては、「学校外で英会話を勉強してきた学生は少数派」、「外国に滞在した経験のある学生は少数派」であることが確認できた。また、学校外で英会話を勉強してきた学生と外国に滞在したことがある学生との間に関連性は認められなかった (Yates の補正済み $\chi^2=2.261$, $p=0.133$)。さらに、両設問についてそれぞれを経験の有無により2群に分け、後述の「27. センター試験得点」に相違がみられるかを確かめたところ、課外学習経験の有無では有意差がみられない ($t=-0.865$, $p=0.390$) 一方で、外国滞在経験の有無では経験のある群のほうがセンター試験の得点が有意に高かった ($t=2.551$, $p=0.013$)。外国滞在の経験が英語力の向上に貢献したと考えるべきか、それともある程度の英語力が外国滞在の誘因になったと考えるべきかは定かではないが、このような課外の活動は交絡変数として常に注目しておくべきものである。

8. 講義に関するその他の項目

1) 選択科目

設問24では「選択科目の受講希望」についてたずねた。全体の86%が必修科目に続いて選択科目も受講することを考えていることがわかった。全体に占める科目別の希望割合は、「英会話 II」78%、「英語講読 II」32%、「英作文 II」30%であった。英会話と講読、英会話と作文との間で選択希望者数の相違を χ^2 検定で分析したところ、講読 (Yates の補正済み $\chi^2=13.799$, $p=0.000$)、作文 (Yates の補正済み $\chi^2=9.086$, $p=0.003$) とともに英会話に比べて希望者が有意に少なかった。この結果から「選択科目まで受講したいが会話志向」という傾向がうかがえる。英語力向上のためには英語にふれる時間を増やすことは不可欠である⁴⁾。本気で英語力を伸ばそうと考える学生にとっては全選択科目を受講することが望ましい。今後、各選択科目の希望率を実際受講率と比較してみること講義のあり方を検討するのに参考になると思われる。

2) 英語を使ってやってみたい活動

「25. 英語を使ってやってみたい活動」については、9つの選択肢の中から第3希望まで選んでもらったとこ

ろ、「洋画を見る」、「洋楽の歌を聴く」、「洋楽の歌を歌う」が上位3項目にあがった。質問の中では「講義の中で」とはあえて限定しなかったため、回答の中には普段の生活を想定したものもあるかもしれない。英語を使うことを迫られることの少ないであろう普段の生活の中で、これらの上位項目は、英語に触れる機会を増やす手がかりになる。また、「講義時間の中では、映画や音楽などを利用したエンターテインメント性が期待されている」と読み取れる。

エンターテインメント志向と「12. 単位を楽にとりたい」との関連については、第1希望活動に上記3項目のいずれかを回答した場合をエンターテインメント志向と定義し、設問12の回答を賛成(段階3-5)群 ($n=75$) と反対(段階1・2)群 ($n=4$) に分けて検定したところ、両群に有意な差はみられなかった (Yates の補正済み $\chi^2=0.144$, $p=0.705$)。このことから、「単位を楽にとりたいか否かに関わらず、映画や音楽を使って英語に触れたがっている」ことがわかった。

同様に、エンターテインメント志向と「4. 講義を楽しむにしている」との関連については、「楽しみ(段階4・5)」群と「楽しみでない(段階1-3)」群との間で第1希望活動における志向の差を検定したところ、「楽しみ」群で有意にエンターテインメント志向が低かった (Yates の補正済み $\chi^2=5.038$, $p=0.025$) ため、「楽しみ」が必ずしも「エンターテインメント性」に直結していないことが判明した。とはいえ「楽しみ」群においても、そのうちの63% ($n=36$) がエンターテインメント性の高い活動を希望していた。

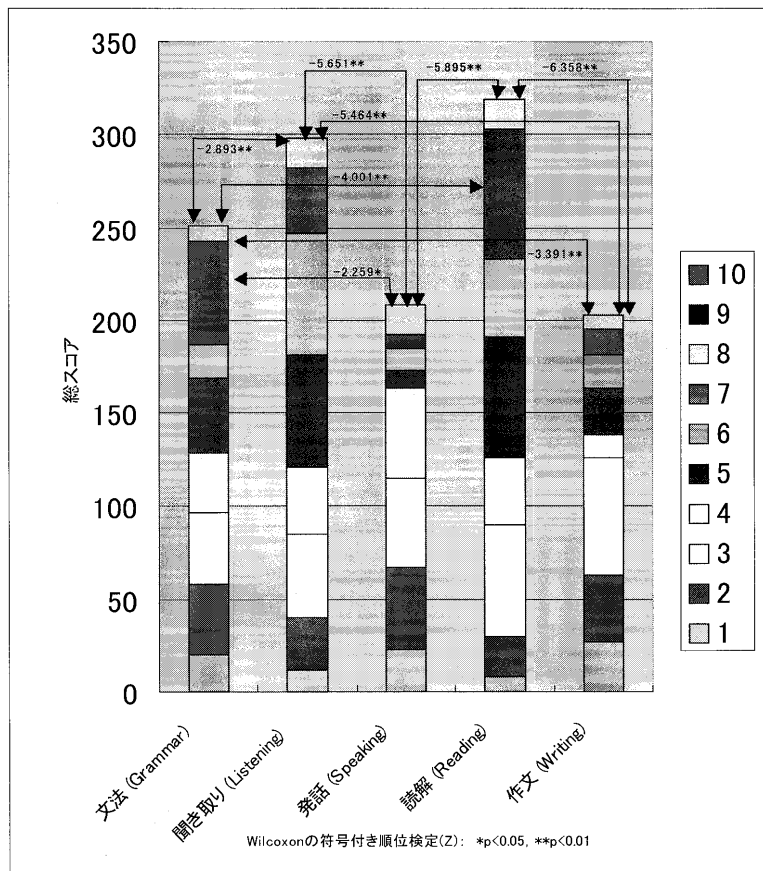
現在の講義においても、定期試験後には、洋楽を聴いて歌詞の一部を聞き取ったりいっしょに歌ったりする活動を取り入れている。娯楽性の高いこれらのソフトウェアを講義に取り入れていくには、学習教材としていかに加工して提示するか、テキストといかに関連付けて学習効果を高めるか、などが課題である。

9. 英語能力

1) 自己評価

「26. 英語能力の自己評価」については、図1のどの側面においても10段階(1=低い、10=高い)中9あるいは10とした者は1人もいなかった。しかしこの評価はあくまで主観によるものであることを忘れてはならない。事実、センター試験の点数が比較的高い140点台の学生の中にも自己評価を1としたものが何名も存在していることから、段階ごとの総件数にとられると判断を誤る恐れがある。一方、英語力の側面ごとに回答者のスコア総計を見ると Writing と Speaking の低さが目立った(図1)。そこで、各側面の中心位置の相違を Wilcoxon の符号付き順位検定で分析したところ、Writing、Speaking とそれぞれ、他の Reading、Listening、Grammar に比べて有意にスコアが低かった。これは、

図1. 英語力自己評価スコア



同一人物内でこれらの側面を他より低く評価した者が多いことを示している。スコアの低い両面は「行動的 (Active) 側面⁵⁾」であり、ReadingとListeningという「受容的 (Receptive) 側面」に比べて苦手意識のあることが明白になった。今後、「英作文」科目においては、Writing力を体系的に伸ばしていけるようなより良いテキストの選定に取り組むとともに、「英会話」科目においては、より効果的なLL機器の活用などにより積極的な発話を促していく計画である。Grammarに関しては、中学・高校時代に嫌というほどやらされてきているはずだが、行動的側面ほどではないものの受容的側面に比べると有意に低く自己評価された (図1)。本学の講義では、文法がわかっていることを前提として、文法的要素を極力押さえ実践面に重点を置いている。今後は学生の文法能力を検証し、その結果次第で文法面の比重を変更することも必要になるかもしれない。

2) センター試験

「27. 平成16年実施のセンター試験の英語得点」は、本学の回答者 (n=68) については平均136点 (標準偏差21.58)、得点範囲108点 (最低70点、最高178点) であった。Z検定の結果、これは全国平均130点 (標準偏差37.27) と比較して有意に高いとはいえなかった (z=1.474, p=0.070)。自己申告という点を差し引いて考

える必要はあるが、本学の学生の英語力は、個人レベルでの格差はあるものの全体としてはセンター試験を受験した全国の大学新入生の平均レベルに達していると推測される。

10. 講義に対する自由意見

最後に「28. 講義に対する希望」を自由に書いてもらったところ、対象者の38% (n=30) から記入があった。「楽しく」、「わかりやすく」という要望が目立った。また、「発言内容に (日本語の) 補足がほしいです。」という意見がある一方で、「全員日本語を使わない授業をやってみたい。」という意見もあった。これらの両極端のコメントには、前述の「27. センター試験得点」にも表れていたように、英語能力の個人格差が反映されている。現在、英語を英語により講義することを中心としながら、重要な点、複雑な点、日本語で端的に伝えたほうが効率的な点などは日本語を併用している。能力別クラス編成を検討する必要性が示唆されたコメントである。

IV. 総合的考察

本報告においては、本学における英語教育の方向性を探るために、新入生全体の傾向に注目してきた。だが、多数派に対応しようとするあまりこの傾向を「ステレオ

與那嶺他：沖縄県立看護大学新入生の英語に対する意識について

タイプ（固定観念）」としてすべての学生にあてはめて考えてしまうと、個々の学生の特異性を見失い、数としては少なくない少数派を取りこぼしてしまう結果になりかねない。学生の中には、米国に数年間滞在した経験のある者もいれば基礎力が不足していると思われる学生もいる。英語の好きな者が多い一方で、好きでない者も14%は存在するのである。

また本調査は、対象を平成16年度の新入生に限っていると同時に、データ収集も入学時点に限っている。このため、本学の新入生が例年同じ傾向を示しているということも、現在の在学学生全体が同じ傾向を示しているということもいえない。さらに、調査対象の平成16年度生の傾向も時間の経過とともに変わりうることも忘れてはならない。

本調査の構造的な限界としては、学生の英語に関する全体像をつかもうとするあまり多岐にわたる内容の質問を作成したことや、妥当性を高めようとするあまり項目数が相対的に多くなったことから、調査内容が複雑になった点があげられる。さらに、今回は調査票に対応がつけなかったため、回答者ごとの将来起こりうる変化を追跡することは不可能となった。次の機会からはこの点も改善することとしたい。

V. 結論

今回の調査から、平成16年度の本学の新入生には全体として次のような特徴がみられる。英語自体については、「好きで興味はあるものの苦手意識をもっている」「受容的能力（Reading, Listening）に比べて行動的能力（Writing, Speaking）に苦手意識がある」「入学時点の英語力は、センター試験を受験した全国の大学新入生の平均レベルに達している」などである。

英語の講義については、「学習意欲を十分もっており講義を楽しみにしている」「大部分の学生が英語の運用能力を伸ばすことを重視しており、そのうち2人に1人は看護について学びながらという点も同等に重視している」「読み書きも伸ばしたいが会話優先」「選択科目まで受講したいが会話志向」「楽に単位をとりたがっている」「楽に単位をとりたかどうかにかかわらず、講義時間の中では映画や音楽などを利用したエンターテインメント性が期待されており、その傾向は特に、講義が楽しみではない学生に顕著である」「3人に2人が宿題はないにこしたことはないと考えるが、彼らも学習目的はわからないこ

とはなく、学習意欲もあるほうである」などである。

英語とのかかわりについては、「自分の将来に英語は不必要と考える者は少ないほうで、その傾向は特に、講義以外で英語にかかわることに抵抗の少ない学生に顕著である」「2人に1人は資格に興味があり英検に慣れている」「学校外で英会話を勉強してきた学生は少数派」「外国に滞在した経験のある学生は少数派」「全体の2人に1人は英語圏への留学を希望し、そのうちの2人に1人が英語圏で働く希望ももっている」などである。

これらの結果から、新入生が概して大学英语に取り組む意欲や能力を備えていることをふまえ、今後は講義の中で行動的側面をより丁寧に指導して自信をつけさせるとともに、視聴覚教材を効果的に利用しながら講義をより活性化していきたい。具体的には、1)「英会話」においてLL機器を駆使することにより個人が発話しやすい環境を提供するとともに発話機会の絶対量を増やすこと、2)「英作文」においてエッセイのテーマにそったビデオを用いて関心を高めるとともに講義中の執筆時間がある程度確保することである。なお、この全体像は当該年度に限ったものなのか、例年の傾向であるのかを明らかにするためには、同様の質問紙を用いて新入生を継続的に調査する必要がある。また、入学時点での傾向が講義をとおしてどのように変化していくかについても、同様の質問紙を英語科目履修後に記入してもらって比較することにより、教育的効果を検証する1つの材料となりうる。

謝辞

本調査に協力してくださった本学の平成16年度新入生をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

文献

- 1) SIL International : www.ethnologue.com/show_language.asp?code=ENG, 2004.
- 2) 田崎清忠：英語教育理論（再），p 131，大修館書店，1985.
- 3) 財団法人日本英語検定協会： www.eiken.or.jp/info/level/index.html, 2004.
- 4) 田崎清忠：英語教育理論（再），p 161，大修館書店，1985.
- 5) 田崎清忠：英語教育理論（再），p 134，大修館書店，1985.

Perceptions of Freshmen Toward English at Okinawa Prefectural College of Nursing

Atsushi YONAMINE, M.Ed.¹⁾ D. Craig WILLCOX, Ph.D.¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to survey new freshmen at Okinawa Prefectural College of Nursing (OPCN) about their perceptions toward English and relevant matters so as to improve the college's English education, especially with regards to better learning motivation.

The 28 item survey was conducted during the first lecture of Speaking Nursing English I to all of the 80 freshmen enrolled in the Department of Nursing in Spring 2004. The results indicated that this year's newcomers were generally characterized as follows.

Concerning English itself, they liked it and expressed interest but felt poor at it, especially at active skills--writing and speaking, compared to receptive skills--reading and listening. At the point of enrollment, their English proficiency was as high as that of the average student that had taken the National College Admission Center Exam, Japan's national aptitude test generally required before college admission, which is comparable to SAT in the U.S.

Regarding English courses, the newcomers were motivated enough and looking forward to taking them. Their learning focus was on developing communication abilities, in particular, conversation skills. On the other hand, the majority of them wanted to earn the English credits easily. Entertainment such as music and movies was another aspect expected of the lectures.

These findings suggest that the majority of OPCN freshmen are motivated as well as prepared for college English. In the future lectures, active skills will be more emphasized to develop the students' confidence. Also, they may be more stimulated through effective use of audiovisual materials.

Key Words: English perception, nursing college, English education

1) Okinawa Prefectural College of Nursing